故長尾義三先生を偲んで

栗栖弘典
（大学商学部教授）

長尾義三先生といえばすぐに、眼を細められた先生の温顔と難解であった講義のことが思い出される。

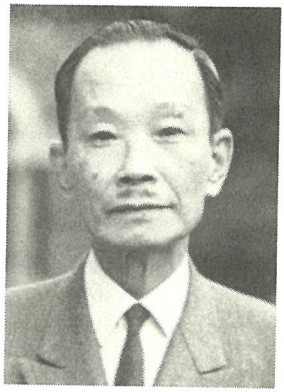
私がはじめて先生の講義を聴いたのは、第二次大戦が終って、まだその混乱と痛手が癒えていなかった昭和二三年の秋のことである。そこは、現在同志社高校のある洛北岩倉の地、同志社経済専門学校の教室においてであった。講義は外国為替論であったが、今思えば熱のこもった高い水準の内容であった。二〇歳は過ぎていたが、日中戦争から太平洋戦争へと日本の閉された環境の中にいた私にとっては、理解するにはあまりにも未知の世界についての話であり、強い知的刺激を感じつつも大変難解であったことが印象に残っている。

先生はその年の七月、小樽経済専門学校から同志社へ赴任されたところであった。これは経専を母体とした新制の同志社大学商学部設立に参加されたためである。

明治三四年六月、大阪にお生れになった先生は、天王寺中学、神戸高商（現神戸大学）を経て、大正一五年、東京商大（現一橋大学）を卒業され、昭和三年高岡高商（現富山大学）教授、昭和一九年小樽高商教授を歴任された後、同志社に着任されたのである。

先生が経済学・金融論の研究、教育に従事され始めた昭和初年の頃、英国に代った新生覇権国家米国では、一九二〇年代の繁栄の時期を謳歌しつつあったが、すでに大恐慌へのひそかな足音が迫り来つつあり、まさに金融恐慌を契機とした激動の現代史の幕が切って落されようとしていた時であった。そしてその後、世界経済は、金本位制から管理通貨制への途を歩みつつ自由の終焉と統制の強化を経て第二次大戦への悲劇に到ったのである。

この間、昭和九年から一一年にかけての二年間、独・英・米に留学された先生は、この激動の世界の中で先生の金融経済学の体系、すなわち長尾金融論を形成されたものと思われる。当時欧米では、フィッシャー、ケインズ、ハイエク、ホートレー、ロバートソン等世界の頭脳とも言える人達が、経済学、金融論のアポリアに知的挑戦を行っていた金融論の創成の時期であったと言ってよいであろう。長尾金融論もまさにこの様な問題状況の中で課題に答えようと意図されたものであった。先生の問題は経済理論の基礎の上に金融



●長尾義三氏略歴●

1901年６月　大阪市南区で誕生
1926年３月　東京商科大学本科卒業
1928年10月　高岡高等商業学校教授
1944年３月～1948年７月
　小樽高等商業学校教授
1948年８月　同志社経済専門学校教授
1949年４月　同志社大学商学部教授
1950年４月　同志社大学大学院商学研究科修士課程教授
1957年４月　同志社大学大学院商学研究科博士課程教授
1962年４月～1964年３月
　同志社大学商学部長
1971年６月　定年退職
1971年７月　同志社大学名誉教授の称号を受く
1991年11月24日１時30分永眠　90歳

の領域を明確にし、その体系化を計ることであり、広壮にして緻密な体系化への挑戦であったということができる。その中には、戦後大きく展開された資金循環分析、一般均衡理論、金融資産・証券、リスク分析等の視点が含まれていたのである。先生の高岡高商時代に教えを受けられた一橋大名誉教授、元経済企画庁経済研究所長篠原三代平教授の親しみと感動を込めた評言によれば次のように言われている。「私が経済学について全く白紙だった高岡高商の学生の時代に、O(註)教授の独特な経済原論と、長尾教授の世にも風がわりな金融論を聞くことができたのは幸いであった。この二人の旧師は自らの独創的な講義を通じて、学問における独創の重要性を、印象深くきざみつけてくれたように思う」と。これは氏の名著『日本経済の成長と循環』の序文の一節である。

　金融の理論は、特に戦後、貨幣経済理論として大きく発展して来たが、本来金融論は貨幣論・銀行論に共通の基礎をなす概念であり、その意味では金融的経済理論として体系化されるべきものでなくてはならなかったであろう。長尾金融論の課題はまさにここにあったものと考えられる。金融論としてよりも貨幣論・銀行論が多く講義されていた当時、若き学徒の篠原教授が「世にも風がわり」な講義と感じられたのも故なしとしない。しかし同時に、それがすぐれて独創的であると映ったところに長尾金融論の意義が示されていたと思われる。

　学生に接しられる長尾先生は極めて寛容であった。しかし放任ではない。六〇歳、七〇歳になられても夜遅くまで勉強しておられた。「お身体は大丈夫ですか」と尋ねた時「眠くなったら寝て、食べたい時にたべる。だから大丈夫だ」と言われた。奥様にとっては大変であったろうが、先生は御自分のリズムを終始大事にしておられたのであろう。集まれば口にする先生の思い出話は多い。しかし昨今の世界経済の動きを見るときあまりにも金融に係わる難問の多さに、先生が研究を始められた昭和初期の頃を思い浮べ、あらためて先生の研究への情熱とご努力を偲ぶのである。

（註）引用者略記